カトリック教報

カトリック長崎大司教区
広報委員会
〒852－8113
長崎市上野町10－34
カトリックセンター内
TEL 095－843－3869
FAX 095－843－3417
振替口座 01880－5－2699
発行人
山田良秋
印刷所
株式会社 インテックス

「ともに」を体験、長崎青年の日

11月3日 3年ぶりカトリックセンターで開催

11月3日（木）午前10時から、カトリックセンターにおいて、大司教様と教区青年とが〝集う〟「長崎青年の日」を開催することができました。3回目の開催となった今回のテーマは「ともに」でした。青年12人（教区青年11人と求道者1人）が参加し、スタッフの司祭・修道者とともに一日かけてテーマを深め、分かち合いました。

まずレクリエーションでお互いを知り合い、それから（事前に準備された）中村倫明大司教様による青年へのメッセージ動画の話を聴きました。

大司教様は「宗教は『ともに』を目指す」ためのものであることを、報道されている宗教問題に触れながら説明し、「わたしたちの信仰は、排除や限定をしない、神様と人とともに歩むもの」だと話されました。

青年たちは、このメッセージを深めるため、「ともに」考えなければいけない社会問題と、天地創造をモデルとした「ともにあること」を、グループに分かれて絵で表現し、分かち合いました。最後にミサで青年が作り上げた作品を奉納し、ともに集えた喜びと、一日を通していただいた恵みを感謝しました。

なお、青年に作成していただいた絵は、大司教館に展示してありますので、多くの方に見ていただければうれしく思います。

参加した青年は「初めは緊張したけど、とても和気あいあいとした集いだったので、すぐになじむことができ、うれしかった」「一人では難しい問題でも、みんなでアイデアを出しながら導き出すことができることを学んだ」と感想を話してくれました。

ともに集ったこの時間が、教会での青年活動に初めて参加した方にも、また地区や小教区の青年会存続で悩む人たちにとっても、励みになったのではないかと感じました。今後もさらに多くの青年を迎える場を提供できるよう、委員会が努めていくことができればと思います。

この青年の集いのため、ご尽力くださいました中村大司教様をはじめ、スタッフとしてお手伝いくださったお告げのマリア修道会のシスターの皆様、各小教区の主任神父様と青年担当者に心より感謝いたします。教区青年のために引き続きお祈りくださいますよう、よろしくお願いいたします。

教区青少年委員会
委員長　川端 志範

新型コロナウイルスによる影響で2019年以来3年ぶりの開催となった「長崎青年の日」。感想にあるように、和気あいあいとした雰囲気の集いとなった。

交わってみなければ分からない

FABCアジア司教協議会連盟創立50周年記念

FABC創立50周年記念総会に行ってきました。本来は2年前の2020年が創立50周年でしたが、コロナ禍のために記念の集まりができず、開催が本年の2022年10月12日～30日となりました。アジア29カ国からの枢機卿・司教がほとんどですが、その他にも司祭・修道者・信徒も合わせ226人が参加しました。日本からは6人の司教が参加しました。本来私は補欠でしたが、ピンチヒッターとして出番が回り、途中20日からの参加でした。

FABCとはアジア司教協議会連盟の英語略で、アジア各地にある司教協議会の連盟組織です。事務局が本年から、香港からタイのバンコクに移転しています。今回の会場は、バンコク郊外にあるバンコク教区の司牧トレーニングセンターでした。大宿泊施設、大小チャペル、大小研修ホールなどの他、池やプール、テニス、ラグビー場も含めた広い敷地の中にあります。集まったアジアの司教たちは、ともに祈り分かち合い、食事をともにしながらFABCのこれまでの50年を振り返り、そしてこれからのともなる歩みを見つめていきました。私にとっては、たくさんの司教様方と出会えたということが一番の収穫でした。

実はFABCの存在のことは耳にはしていましたが、その実態も、同じアジアにたくさんの司教様方がおられることも、出かけて交わってみなければ分かりませんでした。英語が堪能でない私にも温かい声と手を差し伸べてくださった方々の温もりがうれしかったです。

バンコク日本人会の皆様方ともお会いすることができました。

（中村 倫明）

平和の祈り・霊的花束

ウクライナとロシアのため、また全世界の平和のためにお祈りいただいた皆様からのたくさんの霊的花束を、この11月にお預かりしました。ありがとうございます。両国の関係者へのお届けについては後日改めてご報告いたします。

教区平和推進委員会

カ障連の発足と長崎大会に向けて

障害者から私たちの信仰のあるべき姿を探し求めて！⑧

長崎大会開催におけるカ障連からの4つのお願い！

日本カトリック障害者連絡協議会（カ障連）
事務局長　小池 政男

第1 障害者に理解と支援を！

神は天地を創造され、そして最後に人を造られ、「極めて良かった」と言われた。この「人」とは生まれてくるすべての人、つまり健常者だけではなく障害者も生まれてきて良かった、と神さまは言っていると思います。この意味を考えることが大切なことだと思います。

またイエスは盲人に対しても、罪を犯したからではなく「神の業（わざ）」が現れるためである、つまり当事者と周囲の人々への良き知らせ、福音のためであると語っています。最後の審判では、「わたしが飢えていた時に食べさせ、渇いていた時に飲ませ、旅をしている時に宿を貸し、病気の時に見舞い、牢屋にいる時に訪ねてくれた」人が救われると言っています。最も大切な掟は、神さまを愛することと隣人を愛することであると言っています。イエス自身も社会から見放されていた障害者や罪びとに近づき何をしてほしいのかと尋ね、願いをかなえてくださいました。

このようにイエスも聖書も、いかに小さくされている人たちに心を配るかを重視します。いくら素晴らしいみことばを語ることができたとしても、愛の実践がなければ神さまのみ旨にかなうことになっているのでしょうか？ 私たちの生き方が問われていると思います。

私自身も約20年前の第5回カ障連東京全国大会に初めて参加した時に、当時の山田会長から「教会に障害者が一人もいない教会は異常です。統計的に障害者が1割いるのに。いないのではなく教会に来られる体制（送迎、バリアフリー、手話、要約筆記、点訳など）が出来ていないから来られないのです」と聞きました。「教会に障害者が来ることができれば、教会としてどう対応すべきか気づかせてくれて体制をつくることができるのです。そうなれば障害者だけでなく、高齢になって、目や耳が不自由になっても、車いすになっても教会に来ることができるのです。それがノーマライゼーションです」と。私は「目からうろこ」でした。私は知らない間に、障害者はいない方が良いという優生思想に浸っていたことを思い知らされました。それから私は変わりました。

ぜひ長崎教区の皆様も、この長崎大会を通じて障害者や高齢者に対して優しい教会づくりをイエスに倣ってやっていただくようお願い申し上げます。

第2 長崎大会に参加を！

この長崎大会に、障害者だけでなく障害を持っていない方たちにも多く参加していただき、障害者への理解と支援をお願い申し上げます。

第3 全国から参加する方の交通費補助のための寄付を！

全国から参加するには交通費が大変です。参加したくてもお金が無ければ参加できません。カ障連としては一人でも多くの方に参加していただくために、今まで交通費補助として開催教区の皆様に寄付をお願いしてまいりました。長崎教区の皆様にもよろしくお願い申し上げます。

第4 長崎教区で障害者団体の設立と加入を！

カ障連の全国大会は大会が終われば終わりではなく、その後も障害者への理解と支援を継続していくために障害者の加盟団体設立をお願いしています。長崎教区の皆様に、新設される障害者団体に加入していただくようお願い申し上げます。

以上のお願いを携えて、長崎大会の実行委員会の皆さんが教区内の各小教区をキャラバンされると思いますので、その際はご理解とご支援をよろしくお願い申し上げます。

福音化推進部からお願い

主は、障害者を「神の業（わざ）が現れる」（ヨハネ9・3）存在とされましたが、教会の中で障害者はいつも隅の存在でした。

1981年聖ヨハネ・パウロ2世来日時、教皇の勧めでカトリック障害者連絡協議会（カ障連）が発足し、全国の教会で障害者が参加し交わり、教会に新しい信仰の喜びを興しています。

今年10月、教区にようやくカ障連長崎支部が発足し、来年10月、カ障連長崎大会を開き、これを機に長崎教区でも障害者が参加し交わり、教会に新しい風が吹き込まれます。長崎支部への参加は、障害の有無にかかわらず可能です。「神の業」の目撃者になりませんか。

【連絡先】カ障連長崎支部
〒852－8113 長崎市上野町10－34
TEL 070－8569－0522
FAX 095－807－4910
ksrnagasaki@gmail.com

※個人情報は門外不出を遵守いたします。

ほしかげ

保育園のクリスマス会を思い出す。「しずけき」「世界ではじめのクリスマス」などの歌を元気よく歌ってくれていた。世界で初めのクリスマスプレゼントであるイエス・キリストにちなみ、今欲しいクリスマスプレゼントを列挙してみたい▲イエス・キリストは父なる神が私たちにくださった最大の贈り物である。贈り物の効果が最大となるように、「ユダヤ人のためだけに」遣わされたのではなく「全人類のために」遣わされた。すべて贈り物は、最大の効果を発揮するように考える必要がある。長崎教区は2019年から、聖フランシスコ病院の運営に関与するようになった。これは神様からの大きなプレゼントである。地域に多大な貢献をしている病院施設を通して、キリストの愛を伝えることができる▲教区で働く司祭・修道者も神様からのプレゼントである。自身を神に奉献する生き方を通して、限られた人々のためではなく、教区のため、世界の教会のために働く。中でも専門的な学びを修めた人材は、教区に最大の効果を発揮する贈り物である。法律（教会法）に明るい人材、音楽、建築、経済、医学、ひょっとするとスポーツも、専門的な人材が与えられれば教会は豊かになれる。先に述べた聖フランシスコ病院のためにも、必要とされる学びを修めた司祭・修道者が神様からプレゼントされることを願いたい。

（輝）

カナダ・モントリオールを訪ねて

スルピス会と恩師イエール神父様

名誉大司教　髙見 三明

今秋カナダ・モントリオールへ、スルピス会のイエール神父様を訪ねる機会に恵まれました。スルピス会と恩師のことについて少し書き留めたいと思います。

1563年、宗教改革を受けてカトリック教会の刷新のために開催されたトリエント公会議は、各教区に司祭養成のための神学校の設立を要請しました。以来、各国で神学校での司祭養成が始まりました。

〔右〕1933年福岡に最初に派遣されたレージェ師㊧とプレヴォー師。／〔左〕福岡の大神学校（現福岡カトリック神学院）。1957年度新学期の頃と思われる写真。最前列右端にイエール師。

聖ビンセンチオ・ア・パウロの弟子の一人で、パリの聖スルピス教会の主任だったオリエ神父（1608～57年）は、1642年、司祭の養成に専念する教区司祭の会「聖スルピス司祭会」を創立し、1651年会員は教会の隣接する神学校で神学生と共同生活をしながら、教会刷新のための司祭養成を始めました。やがて彼らはフランス国内だけでなく、カナダ（1659年）とアメリカ（1791年）にも派遣されました。会員は教区司祭ですが、修道会と同じ組織を作り、フランスとカナダとアメリカ管区があり、パリの本部には総長がいます。フランス管区はベトナムやアフリカで、カナダ管区は1933年から福岡で、1953年からは南米で司祭養成に携わるようになりました。

ブルトン福岡司教の要請で来福した最初の会員はレージェとプレヴォー神父様で、彼らに3人が続きました。戦後の1948年、東京と福岡の2カ所に大神学校が創設されると、カナダから6人の神父様方が相次いで来福しました。延べ11人のうちイエール神父様だけがご存命です。日本人会員は、延べ12人ですが、現時点の養成者は、牧山強美、湯浅俊治、熊川幸徳、中尾直通（長崎教区）、大山悟（大分教区）、ベトナム人のベルナール・ファン（カナダ、セン・ボニファス教区）の6人の神父様方です。

ゼノン・イエール神父様は、1924年7月、モントリオール隣のセン・ジャン教区で聖職者の家系に生まれました。父上の長兄はスルピス会司祭、モントリオール大神学校長、セン・ボニファス協働大司教でしたが、54歳で病没。弟も司祭になり大神学校教授でした。2人の姉妹は聖アンナ修道会のシスター。母親の兄弟も司祭になり、姉妹は修道女でした。イエール神父様の兄弟は10人、姉妹は4人。長男はイエール神父様来日の3年後に死亡したため、神父様が事実上の長男の役割を果たしてきました。七男はスルピス会員として聖書を教え、姉妹の2人は聖アンナ修道会とカルメル会のシスター。これまで4人の兄弟と1人の姉妹が帰天しています。

イエール神父様は、1953年11月に福岡に着くなり、6人の助祭のためにラテン語で神学の復習を手伝いました。2年間の日本語習得の後、主に旧新約聖書、ギリシア語とヘブライ語を教え、神学生の霊的指導、院内での種々の担当、司教協議会への協力などをしました。特に『聖書新共同訳』の固有名詞の翻訳を担当し、『聖書思想事典』『聖書入門』『マルコ福音書の読み方』などの翻訳に携わるなど、40年間教会一致運動と福音宣教にも貢献しました。50年と数カ月の働きを終えて、2004年4月カナダに帰国され、回顧録など、在日中の足跡を整理しています。

〔右〕1951年現在地に新校舎が落成。司祭養成が始まった。／〔左〕今年10月モントリオールでイエール師と再会。

神父様の霊的指導を受けた卒業生のうち5人は司教（郡山健次郎、髙見三明、前田万葉、故浜口末男、中野裕明）です。

神父様は、「カナダは自国のように感じない。いつも福岡と日本の教会のことを思い、そのために祈っている」とのことです。

スルピス会の神父様方には感謝しかありません。故人には永遠の安息を、イエール神父様にはご健勝を祈りたいと思います。2年後100歳になります。

深堀小教区設立50周年

善長谷ルルド案内板除幕や記念ミサ

深堀小教区（鍋内正志主任司祭）は、小教区設立50周年を迎え、10月16日(日)深堀教会において、中村倫明大司教主司式、長崎南地区近隣の司祭5人の共同司式で記念ミサを行った。ミサに先立ち、巡回教会の善長谷教会下のルルドではルルド案内板の除幕式も行われた。

記念ミサの説教で中村大司教は、私財を投じて境内地を購入するなど、教会創立の礎となった渋谷 治神父がヘブライ語原典から翻訳した聖書を掲げ、聖書を読んで神のことを知ってほしいと強い思いで翻訳されていたことを紹介した。

ミサに引き続いて行われた感謝式の中では、節目の年を特にこの1年間にわたって祈りのうちに過ごした二つの企画が紹介された。「マリアのチャレンジ」（個人の祈り）と「ようこそマリアわたしのうちに」（祈りのリレー）の取り組みはノートに綴られ、奉納の時に各家庭を巡回した聖母マリアのご像のもとにささげられた。

ミサ後、記念植樹（オリーブ、ヤマボウシ）が行われ、中村大司教は、子どもと共に木に土と水をかけ、教会共同体のさらなる成長、発展を笑顔のうちに願う式典の結びとなった。

土井ノ浦　キリシタン洞窟ミサ

10月23日(日)新上五島町若松郷にある〝キリシタン洞窟〟でミサが行われた。この洞窟は、明治の初め、弾圧を逃れて3家族が密かに隠れ住んだ場所である。いまだに陸路はなく、海岸も波が荒く格好の隠れ場だったが役人に見つかり、算木責め、水責めの拷問を受けた。

土井ノ浦教会（宮原大地主任司祭）では、毎年死者の日の頃に潮の干満を見計らって渡り、記念のミサを行っている。3年ぶりの開催となった今回、主に上五島地区から約80人の信徒、修道者、司祭が集った。空は快晴だが海上は風が強く、司祭の祭服もめくれ上がるほどで、改めて先祖の信仰のたくましさを思い浮かべる機会となった。ミサ後は、それぞれに洞窟内を探索し、この日の恵みを分かち合った。

参加者の一人は、「『神はおられる』という強い信仰のもとに生き抜いた先祖の足跡に、自分たちの足を重ねて立ち、神と共に過ごす1日になった」と語っていた。

司教座聖堂献堂記念ミサ

11月1日（火）18時30分から浦上教会で、中村倫明大司教司式のもと司教座聖堂献堂記念ミサが行われた。髙見三明名誉大司教と司祭団、修道者、信徒ら約100人が共に祈った。

原爆の後再建された浦上教会は1959年11月1日、教皇公使フルステンベルグ大司教の司式により献堂式が行われた。62年1月1日付で司教座聖堂に指定、それ以来、11月1日が司教座聖堂献堂記念日となっている。この記念ミサは2017年以降、毎年行われている。

中村大司教は説教の中で、浦上四番崩れによる流配から帰還した信徒たちが、旧庄屋屋敷を改修して仮聖堂を建てたことに始まる浦上の歴史に触れ、1945年原爆での教会の破壊・消失とその後の再建を振り返った。そして、ミサの福音箇所（マタイ16・13-19）から「あなたはペトロ。わたしはこの岩の上にわたしの教会を建てる」を引き、教会敷地にある流配50周年記念碑「信仰の礎（いしずえ）」と流配先の一つ・萩で使われたとされる「拷問石」を紹介。先祖が証ししたこれらの信仰の上に浦上の教会が建っていること、その教会が司教座とされていることへの感謝を語り、「私たちも信仰の上に立ち続けていくことができるよう恵みを願いましょう」と祈りへ招いた。

教区主催追悼ミサ

上五島・青方教会で祈り

11月6日（日）14時から長崎教区主催の追悼ミサが中村倫明大司教司式のもと、上五島地区の青方教会で行われた。各小教区からのミサ参加人数を制限するなど、新型コロナウイルスへの感染防止に配慮しながらの実施となった。

ミサの意向として、長崎教区において亡くなった司教・司祭・修道者、そしてすべての亡くなった方々のための祈りがささげられた。

説教の中で中村大司教は、「私たちが亡くなられた方々のためのゴミサをささげている中で、亡くなられた方々は私たちのことを忘れずに一緒にミサをささげてくださっていること。そのことによって私たちは支えてもらっていること。そのためにも私たちは感謝する必要があること」を優しく語った。

訂正　本紙2022年11月号3面「元和の大殉教」に関する講演会録・第2回の記事中、2段目に記載の「徳川秀吉の時代」は「徳川秀忠の時代」の誤りです。訂正し、お詫びいたします。

広報委員会

2022年7月24日カトリックセンターでの記念講演会【3】最終回

「元和の大殉教図」と「元和の大殉教」

長崎純心大学 学長
純心聖母会
Sr.片岡瑠美子

今年9月10日、長崎西坂での「元和（げんな）の大殉教」から400年の節目を迎えた。「元和の大殉教」について皆で学ぶため、長崎教区は7月24日カトリックセンターで記念講演会を開催し、長崎純心大学の片岡瑠美子学長にお話しいただいた。講演の内容を3回に分けてお伝えする連載の最終回。

※大殉教図（複製）は日本二十六聖人記念館に展示されています

Ⅱ　元和の大殉教

(4)凱旋の日

長崎牢（クルス町）の囚人たち

もう一つの行列は、長崎の町（クルス町）の牢からやってくる、斬首される幸せな殉教者たちの行列でした。

「権六は、最初の者（鈴田牢の囚人）の到着を待って、長崎の囚徒全部を、その頃まで、両親や友達の保護の下に私宅に置かれていた人々と共に、奉行所に召し出した。これは若干の修道者の宿主と連座の隣人と女子と昔の殉教者の寡婦、それから、その両親と運命を共にした6人の幼い子どもたちであった」（パジェス）

「彼らは繋がれた手にも、十字架を持っていた。尊敬すべき80歳のルシア・フレイタス女は、他の殉教者に先立っていた。そして彼女が、〝諸人こぞりて 主を讃え奉れ〟を歌えば、他の婦人たちがこれに和した。ある婦人は、その腕に、やはり殺されることになっていた幼い子どもを抱いていた。男の人々は、それに続いた。道はずっと、殉教者の家族の者や町のキリシタンたちで、おびただしい群衆となった」（パジェス）

西坂の丘の上で、二つの行列は一つとなりました。行列が終わろうとしています。

「柵の中に囚人たちが入ると、火あぶりにされることになっているカルロをはじめ、一人一人に柱が割り当てられていた。カルロは自分の柱を愛情をもって押し抱き、この世における航海の終わりとして、何度も胸に抱きしめた」と描写されています。

「大殉教図」では、上段に火刑を受ける25名、一段低いところに斬首される30名が描かれています。しかし、パジェスは、「25本の柱は、ずっと寄せてあった。柱は2列の穴の中に立てられていた。…その酷さは、普段と反対であった。何となれば、火あぶりを言い渡された罪人は、普段は早く苦しみをなくすために、薪に近づけてあった。しかし、この度は、特に烈火は遠ざけられ、亦後に、火勢を弱めて、苦痛を長引かせ、犠牲者たちを絶望の誘惑にさらすために、水をかけて火勢は弱められた」と記しています。

キリストの福音の聖なる教役者たちを火あぶりにする前に、刑吏たちがこれらの殉教者を斬首し、切られた鮮血の滴る首を教役者たちの眼前に並べておくのは何故かと訊ねられた時、刑吏たちはこう答えた。「キリストの信仰告白者たちにこうして恐怖心を起こさせ、皆に火の責め苦を受ける勇気を失わせるためであった」と『日本殉教報告』に記されています。

迫害者にとっては、宣教師に信仰を棄てさせることがキリシタンに棄教を迫る最良の策であったからです。

ベント・フェルナンデスは、長崎で書いた1622年9月16日付ローマ本部のポルトガル担当イエズス会のヌーノ・マスカレニャス神父宛の手紙の中で、「火あぶりの刑に処せられたのは24人でした。同じ時同じ場所で他の31人の老若男女が斬首されました。女性は火あぶりの殉教をした宿主の妻で、他は隣人であり、子どもは彼らの息子たちでした」と記しています。

「彼らは長短の差はあるが幾年も長い間幽閉されていた」と記されていますが、カルロ・スピノラ神父はほぼ4年間、苛酷な牢生活に耐え、弱り切っていました。鈴田の囚人たちの着物は破れ、汚れ、髪も髭も伸び放題、汚れきっていたはずです。野獣のようで誰か判別できないとも報告されています。

殉教の時に身に着ける服を求めましたが拒否されました。

しかし、修道服がなかったとしても、この絵を描いた人は、天国に凱旋する殉教者に一番ふさわしい、修道服という晴れ着を着せてやりたかったと思います。

「大殉教図」に描かれた一人ひとりは自分の会の修道服を着用し、長い年月を経て読めなくなったところもありますが、裾にその殉教者の名前が書かれています。

「元和の大殉教図」からは、制作者の殉教者に対する深い尊敬と愛が感じられます。

大村の鈴田、長崎のクルス町からの囚人として縛られての行列が終わりました。宣教師たちの大航海はキリストにすべてをささげて家族と別れ、祖国を後にしたその日から始まっていました。幾度も幾度も命の危険に遭いながら、信徒に秘跡を授け、言葉と行動で励まし、永遠の命を信じる喜びを分かち合うために与え尽くしたキリストに倣う丸血留の道。司祭、修道士、伝道士、同宿に宿や食事を提供すると、自分だけでなく家族も、五人組の隣人も子どもも老人も容赦なく捕らえられ、拷問され、ついには殺されることを十分知っていても、むしろ宣教師と共に殉教できることを褒美と受け止める宿主たち。母が教えるパライソの幸せを素直に信じ、恵みのうちに我慢を知る祝福された子どもたち。皆がここ西坂の丘で、「キリシタン也トテ成敗」され、今、丸血留になるのです。輝く顔を天に向け、刑を受ける55名のマルチレスの神への賛美と感謝の歌声に群衆も加わっていきました。厳かなその時間、群衆はもはや見物人ではなくなり、マルチレスと一つになってひざまずいていたことでしょう。

Ⅲ　まとめとして

―殉教の目的は死ではなく、愛といのちの証し

福者ルシア・デ・フレイタス
宿主「すべての宣教師の母」

「大殉教図」に向かって、左から4番目の火刑柱に女性が描かれています。長崎出身でポルトガル人フェリペ・デ・フレイタスと結婚していた女性ルシア・デ・フレイタス。フランシスコ会第三会の会員でフランシスコ会司祭2名の宿主という罪名で捕らえられました。80歳近い高齢でしたが、フランシスコ会に限らず、献身的に宣教師をかくまい、「修道者の母」と呼ばれていたそうです。『スピノラ伝』の中に、「この最後の時に臨んで、カルロは近くにいたルシア・デ・フレイタスという名の婦人に罪のゆるしを与えた。この婦人はいずれかの神父のそばで死ぬのを望んでいたが、隣がカルロ神父という順番であったので、神によってその恵みを手にすることができた」。また、1622年の『日本殉教報告』の中には、「（鈴田牢から来た）ジョアンは火刑に処せられた25名の中にあって、火あぶりにされる刑柱が無かったので斬首されて殉教の栄冠を得た」と記し、長崎の牢にいたフレイタスが彼の柱についてしまったと説明しています。

福者カルロ・スピノラ
イエズス会司祭（5番目の柱）

イタリア・ジェノヴァ市の名門スピノラ家に生まれ、1602年長崎に来日。1605年京都に移り、ローマのグレゴリアナ大学でイエズス会の偉大な科学者クラヴィウスから学んだ数学、天文学の知識をもって小天文台を設けて数学アカデミアを開設、徳川秀忠、後陽成（ごようせい）天皇も訪れました。1618年12月13日に捕縛され、その時の様子を自ら手紙に記しています。「私は牢屋に入る時、公衆の前で大泥棒のように縄で縛られて連れていかれました。私は大変満足で、私になされた主の恩恵に対して感謝のしようもありませんでした」と。1620年新しく造られた新牢を鳥籠のようだと言って、詳細な見取り図を書き送っています。「狭すぎて、横たわることも身動きもできないこの牢に多い時は33名いた。数日前、番人が酵母の入っていないひどい焼き方をした、それも日が経って堅くなってしまった少量のパンを私たちに与えた時、皆それをおいしいケーキでもあるように食べてしまったほど空腹はつのっていた」ことも報告しています。カルロ・スピノラは約4年間牢獄の中で苛酷な苦しみに耐え、重病にもなり、やせ細っていながらも、殉教の時を待ちました。「この安らぎによって、私にはこの檻（おり）が天国のように思われます」と書いています。「西坂で柱に縛りつけられたカルロは、声高く詩編を歌い、説教をした。群衆の中のポルトガル人たちの方を向き、キリスト教徒の勇気と徳について説き、大きな感化を与えた」とも記されています。

福者セバスチアン・木村
イエズス会司祭、最初の日本人司祭（9番目の柱）

聖フランシスコ・ザビエルが洗礼を授けた宿主木村氏の孫。平戸生まれ、12歳から同宿として教会に奉仕し、1580年有馬のセミナリヨが開設されると同時に入学しています。1584年イエズス会入会、臼杵のノビシヤドで修練を受け、86年イエズス会員として修道誓願を立てました。マカオで神学を修め、1601年長崎でセルケイラ司教から司祭叙階を受けました。同じくイエズス会のルイスにあばらと二人の叙階式、それは日本で最初の叙階式であり、初めての日本人司祭の誕生という盛大な式でした。1620年イエズス会員として盛式誓願宣立。京都、九州各地で優れた説教者として活躍しました。ひたすらに教えを説く行動力と忍耐と謙遜、徳深い修道者の姿を思わせてくれますが、表に出ない司祭。1620年密告により捕縛され鈴田牢に入れられました。処刑時57歳でした。

福者フランシスコ・モラーレス
ドミニコ会司祭（14番目の柱）

スペイン・マドリードに生まれ、若くしてドミニコ会入会、マニラに設立されたばかりのロザリオ管区に派遣されましたが、1602年日本におけるドミニコ会布教長として甑島（こしきしま）に上陸、この島や京泊周辺で布教しています。1609年薩摩藩の迫害が始まると京泊の教会堂を解体して長崎に運び、代官村山等安一家の援助で優美な教会堂を建立しました。現在、発掘されたサント・ドミンゴ教会跡はキリシタン時代唯一の教会堂遺構として保存されています（桜町小学校の地下遺跡）。1614年の追放令で船に乗り込むも沖でキリシタンの小舟に乗りかえて残留、5年間村山等安の家にかくまわれて活動し、キリシタンを指導しました。1619年急に襲われて捕らえられ、5カ月壱岐島の牢に入れられましたが、1619年8月11日鈴田牢に移されました。フィリピンで開催された管区会議の命を受け、日本で起こった出来事を順序に従って記録した報告書はキリシタン史研究に大いに役立っています。それは、ホセ・デルガード・ガルシアO.P.編注／佐久間正訳『福者フランシスコ・モラーレスO.P.書簡・報告』キリシタン文化研究シリーズ7、キリシタン文化研究会1972年として刊行されました。

福者イザベラ・フェルナンデス
カルロ・スピノラ神父の宿主

カルロ・スピノラ神父に宿を提供したため数年前に殉教したポルトガル人ドミンゴス・ジョルジの妻。イザベラは、夫と同じくカルロ神父に宿を提供して斬首されるに際し、カルロ・スピノラ神父から愛情に満ちた別れの言葉を受けた。スピノラはイザベラの息子イグナチオの姿を見いださなかった。その子には牢獄に入る前（4年前）洗礼を授け、イエズス会創立者の名をとってイグナチオと名付けた。そこでイザベラに「私のイグナチオはどこですか」と問うと、イザベラは息子を腕に抱き、高く掲げて言った。「ここです。息子を授けてくださった神におささげするために一緒に連れてまいりました」と言い、息子に言いました。「お前を聖なる洗礼の水によってキリストの子どもとしてくださった神父様にお別れをするのです」と。スピノラ神父は、母親の腕にいるこの子を見て、言葉に尽くせぬほど勇気づけられたと証言されています。

福者イグナチオ　4歳

殉教したドミンゴス・ジョルジ・フェルナンデスと妻イザベラ・フェルナンデスの子イグナチオはやっと4歳になったばかりで、着物の愛らしさ、顔立ちの愛らしさによってすべての人の目を引いた。彼は柵の中を大胆に歩き回った。まだ小さかったので怖さが分からなかったのか、天から与えられた大きな力によって強められていたのだろうと『日本殉教報告』に記されています。

1622年9月10日、西坂の丘で命をささげた殉教者に賛美！

其〔ノ〕成敗ヲ辞退セズ、心能ク堪忍致〔シ〕テ受〔クル〕ニ於〔イ〕テハ、丸血留也。

「マルチリヨノ栞」より

（終わり）

〝旅〟帰還から150年目の

「浦上四番崩れ流配地案内」

冊子の発刊に向けて

2018年、広島教区・白浜 満司教様のお言葉から始まった「浦上四番崩れ流配地案内」冊子の作成は、4年の歳月を経て2023年2月以降の発刊予定となった。

この冊子は、1868年第一次の114人に続き、1870年第二次となる浦上の信徒が、名古屋以西20藩22カ所に流配されたことを記録した巡礼用の案内冊子で、総勢三千数百人の浦上キリシタンが捕らえられ苦しみを受けた記録をまとめたものである。

1873（明治6）年2月24日に、「キリシタン禁制の高札」が撤去され、3月14日には太政官達をもって「長崎県下異宗徒帰籍」の布令が出て、キリシタンは帰還した。この年から数えて150年目となるのが2023年である。

過去にも、浦上・西町・城山・本原と4つの小教区が協力作成したものはあるが、「流配地案内」として詳しい内容の書籍を発刊するのは初めてとなる。

2021年10月からは長崎の単独作業となり、これまで共に行ってきた文章などの校正は数人に限定した。これらのことから、白浜司教様との話し合いで文章などの変更も行われた。

なお、巡礼冊子は編集、出版をドン・ボスコ社に依頼している。原稿の内容などに関する打ち合わせもほとんどが終了し、文章の統一などが行われている。さらに、印刷可能な段組みを行う旨の申し入れがあった。出来次第、再度の打ち合わせとなる。また、印刷部数に関しても検討中であるが、今後ドン・ボスコ社との話し合いを経て、発刊へ向かう予定。

「浦上四番崩れ流配地案内」発刊準備委員会
西町教会　松尾　勝
城山教会　川原敏行
本原教会　本山慎二

冊子発刊に携わったメンバーら（司祭と信徒）

冊子表紙（仮）のイメージ

召命の集い・一泊体験

長崎カトリック神学院

10月22日（土）～23日（日）、長崎カトリック神学院において、「召命の集い」が行われた。毎年この時期に行われているこの集いは、長崎各地の教会から参加者（小学5年生～高校生の男子信徒）を募り、神学院に一泊して神学生たちと生活を共にすることで、自らの召命について見つめる機会とするもの。

今年は小学生2人、中学生1人の少人数の参加となったが、その分例年よりも神学生たちとより親密な関わりができたようである。1日目は一緒に体育館で汗を流し、夕方は聖体賛美式、夜はロザリオや勉強の時間も一緒に過ごした。2日目は、神学校の生活や神学生の召命のきっかけの話などを聞いたり、感想文を書いたりして、最後に感謝のミサを共にささげ、召命のお恵みを祈って2日間の日程を終えた。

今回2回目の参加となった子は「楽しい2日間だった。また来年も参加したい」と感想を残した。現在在校生は7人。来年度はその全員が高校生になる。中学生からの新入生を、在校生・養成スタッフ一同心待ちにしている。

（長崎カトリック神学院）

みことばにふれて 196

葛島 輝義　神父
（長崎教区信仰教育委員会、浦上教会）

「あなたがたの見ているものを見る目は幸いだ」（ルカ10・23）

人には、その人の姿を思い出せば、心が安らぎ、命の躍動を覚え、その人が自分にとって大いなる良心のような存在に巡り合うことがある。コロナ禍や戦争の話題に明け暮れた2022年だったが、それでも、多くは、心騒いだ夏があり、出会いを喜んだ秋、いつになく感慨深い月日を綴ったに相違ない…。そして、12月、一斉に脳裏に浮かんで来るあの人、この人、中でも最大の出会いなる主の降誕が心地良い音を立てて近づく。実際に会ってみたい―。そんな強い思いが募ってくる…。

福音には、神の目で見た幸いな弟子たちの姿が描かれている。弟子たちは、旧約時代の人々が知らなかった神の愛を体験した。もちろん、旧約時代においても、神の言葉を聞き、神を見る恵みは与えられたが、それは主を通して与えられたものには遠く及ばなかった。実に、この時代の権力者たちは、人間の知恵で世界を動かせると思っていた節があるが、神の知恵を信じる人には、根本的に神が全世界を動かしていることを見る目が与えられていた。現代を生きる我々は、神の目で全ての出来事を見、主の心をもってあらゆる出来事に接することができるようになれるなら、幸いな人といえるであろう。

今、起こっていること、化け続けるコロナウイルスや狂心的戦争は、高度な文明社会かつ、不安定な自滅というべきか…。単純に見たくない数字、目をふさぎたくなるような映像だらけであるが、人生の中で、こんな体験はなかなかするものでもないだろう。当然、我々は避けたい―。

だが、主は「恐れずに目撃しなさい。目をそらさないで、国が何をしているか、世界がどう動いているか、誰がどんな動きをしているか、しっかりと目撃しなさい。心のよりどころ、生きることの本質までも避ける必要はないし、むしろ、そういうことが今必要ですよ―」そう励ましているのではないか…。

主の介入は、我々が望むような形で来るとは限らないだろう。しかし、主は最良の形で答えられる。大いなる良心たる主の姿を見る日は近い―。浦上の夜空に咲く星たちが、そう合図をしている。

新刊良書

★つなげるつながるクリスマス　絵＝ジェームス・ニューマン・グレイ／訳＝ドン・ボスコ社

パズルでつなげるクリスマス物語。神様からすべての人への贈り物であるイエス様に、動物たちも羊飼いも星も…みんながつながっていきます。パズルのピースをつなぎ合わせて、イエス様のご降誕の場面を完成させましょう！　全文ひらがな。対象1歳から。ドン・ボスコ社、税別900円。

2020年
〝被爆75年から
5年間のチャレンジ〟
https://nuclear-free.net/
核なき世界基金

神学院祭 出会いと再会

福岡カトリック神学院

11月3日（木）、福岡カトリック神学院において、恒例の神学院祭が行われました。神学院祭とは、皆さまの出会い・再会の場であり、神学生が皆さまに感謝を伝える場です。今年のテーマは、「わたしたちの歩みを平和に導く」でした。

今回は3年ぶりに通常開催を計画しました。皆さまのご協力により無事に実行できたことを、心よりお礼申し上げます。

そして神学院祭では主なプログラムとして開式ミサ、各種企画、講演会を準備しました。

中村倫明大司教様、ヨゼフ・アベイヤ司教様、森山信三司教様の3人が来られ、多くの司祭、信者の皆さまと共にミサをささげることができました。700人に迫る人数でのミサは、うれしくそして懐かしいような感覚があったように思います。

各企画では、子どもが参加できる企画も多数あり、院内のいたるところで元気な声が聞こえてきたことが印象的でした。中でも綱引きでは、小さな子から大人までの性別や年齢を超えた参加があり、一本の綱を大きな声を出しながら引き合っていました。皆の元気な顔、笑顔の花が神学院では満開でした。

講演会では大分司教の森山司教様にお話ししていただきました。「私はコロナのせいで何かが出来なくなったという言い方が苦手です。コロナがあっても出来る事を探す必要がありますし、そのための便利な道具も、それを実行に移す力も私たちは神様から頂いているはずです」司教様のこの言葉に勇気づけられるとともに、自分に与えられたものを生かす責任があることを再確認させられたように感じました。

そして、今年から同じ敷地で暮らすことになった福岡コレジオの面々の企画「ファミリーデー」も同時に開催されました。さらには長崎の小神学校のメンバーも神学院祭に参加してくれました。これらの仲間と共に、皆さまに日ごろの感謝を届けることができ本当にうれしく思います。

常日頃から、物的・霊的に支えてくださり本当にありがとうございます。これからもキリストの導きに信頼して歩みを続けたく思います。

（神学院祭実行委員長
神学科2年　山頭 牧夫）

マリア 中村モニカ修道女

（お告げのマリア修道会）

10月12日逝去。94歳。1928年五島市生まれ。41年奥浦修道院に入会。59年初誓願、68年終生誓願。聖マリア病院で働き、看護師以外の業務もこなす多才な人だった。特別養護老人ホーム「聖マリアの園」の開設時には生活相談員として勤め、基礎づくりに貢献。5年後病院に戻り、退職まで通算40年以上病院と共に歩んだ。20年ほど前に心臓のバイパス手術を受け、闘病生活を余儀なくされたが、痛みを訴えることなく、忍耐強くささげた。手先が器用で、祭壇布縁などをレースで仕立てたり君子蘭を見事に咲かせたりした。また、いつも姉妹への親切を忘れなかった。

葬儀ミサ・告別式は14日、福江教会で行われた。

ヴィタリナ 狩浦ユキヱ修道女

（純心聖母会）

10月19日逝去。85歳。1937年五島市生まれ。中学3年から学生志願生として入会。59年初誓願、68年終生誓願。初誓願後52年間、長崎、広島、埼玉など幼児教育の場で園児や保護者との関わりを通して福音宣教に励んだ。口数は少なかったが優しく温かい人柄は、卒園生や教会の信徒にも親しまれ、慕われた。2011年手術を受け、13年幼児教育の場を退き、ナザレト修道院に派遣。21年再び心臓の手術を行い、痛みや苦しみを祈りのうちにささげていた。今年9月に入院し小康状態が続いていたが、周りの方への感謝の言葉を忘れなかった。10月容態が悪くなり、夜間の見守り体制が続いたが、静かに御父のみもとに召された。

カタリナ 松岡幸子修道女

（お告げのマリア修道会）

10月23日逝去。88歳。1933年五島市生まれ。48年三井楽修道院に入会。59年初誓願、73年終生誓願。入会後は、共同体の調理補助として働いた。30歳の頃、大浦に開設された聖母カテキスタ学院で学び、約10年間、大浦教会で奉仕。その後、上・下五島、太田尾で、調理とカテキスタの資格を生かし活躍した。20年ほど前から甲状腺の病を患い、数年前から体調を崩して「聖マリア病院」「みみらくの里」スタッフの手厚い看護・介護を受けた。若い頃は夜中に起きて聖堂で祈りや聖歌をささげ、神への揺るぎない信頼を持ち続けた。

葬儀ミサ・告別式は25日、三井楽教会で行われた。

お知らせ

〈一菜募金の支援状況〉

火災により被災した大野小教区信徒へ見舞いのため、15万円（10月27日送金）。

感謝

―香典返し―

長崎大司教区
●田中英樹様（水主町）
故マリア田中フサエ様

右の方からご寄付・ご芳志を賜りました。お礼とご報告を申し上げます。